

(3) 航空機モニタリング調査

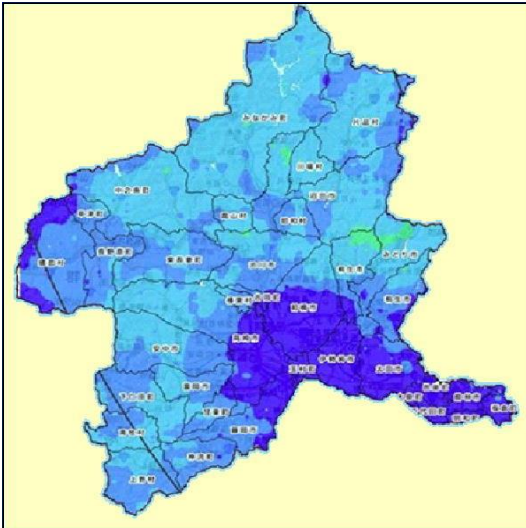
原子力規制委員会(平成24年まで文部科学省)が、定期的にヘリコプターを用いて、上空での測定値から「地表1 m高さの空間放射線量率」に換算し公表しています。県内では、過去に6

回測定が行われました。

県内の空間放射線量率は、時間の経過と共に減少してきています。

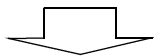
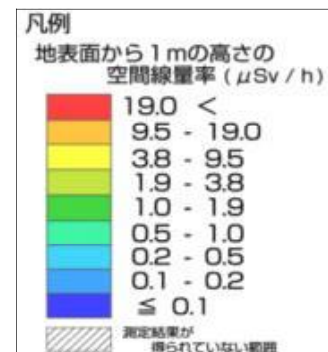
県内の航空機モニタリングの調査結果

第1回(平成23年9月)

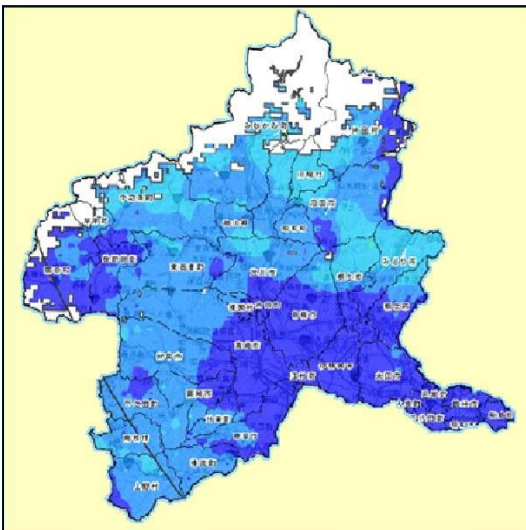


北部及び西部地域で、他より線量が高い地域が認められます。特に、北部山間部の一部では、空間放射線量率が毎時0.5~1.0マイクロシーベルト(緑色)の地域があることが分かります。

県中央及び東部地域では、放射性物質の沈着はほとんど認められません。



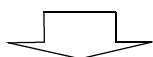
第2回(平成24年5月)



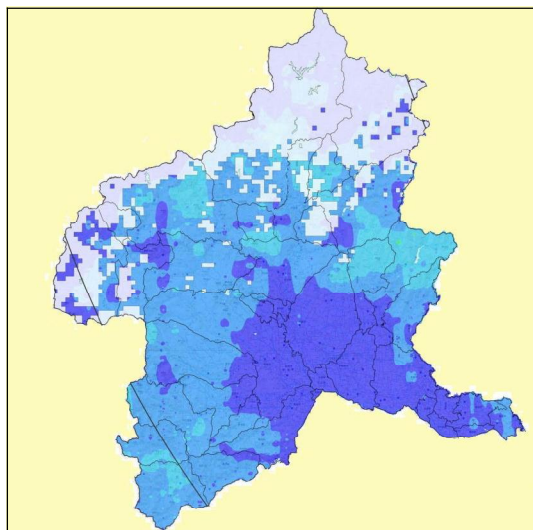
第1回の調査から9か月が経過し、全体的に放射線量の減衰が認められます。北部山間部の一部にあった空間放射線量率 毎時0.5~1.0マイクロシーベルト(緑色)の地域は、ほとんどみられなくなっています。

※ 福島第一原子力発電所から80 km圏内の地域を対象に、国が事故直後と比較した空間放射線量率の減衰率は約23%であり、本県でも同様の水準と考えられます。

※ 北部山岳地帯は積雪のため、計測できませんでした。(白色)

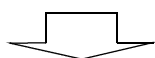


第3回（平成24年12月）

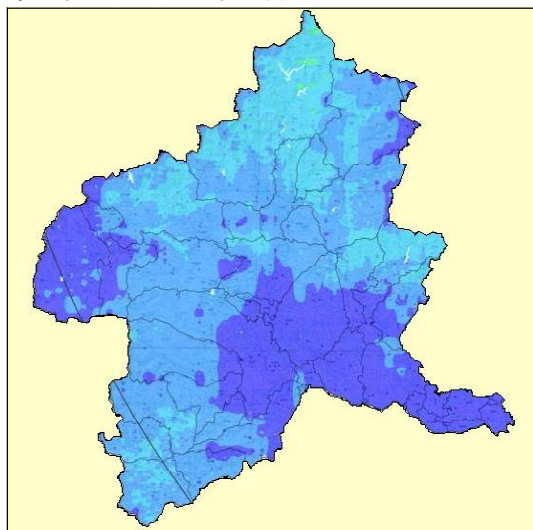


北部山間部で積雪のため測定できなかった地域がありますが、第1回の調査から15か月が経過し、放射線量の明らかな減衰が認められます。

※ 福島第一原子力発電所から80 km圏内の地域を対象に、国が事故直後と比較した空間放射線量率の減衰率は約40%であり、本県でも同様の水準と考えられます。



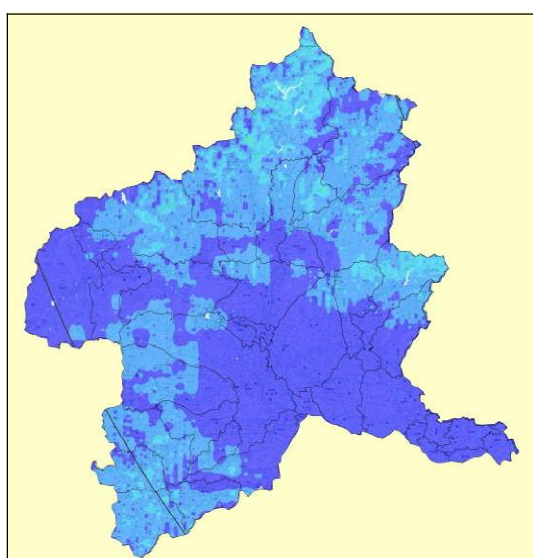
第4回（平成25年11月）



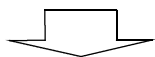
積雪のため計測できなかった北部山間部についてもデータが得られ、第1回の調査から26か月が経過し、北部山間部でも放射線量が減少している状況が分かります。



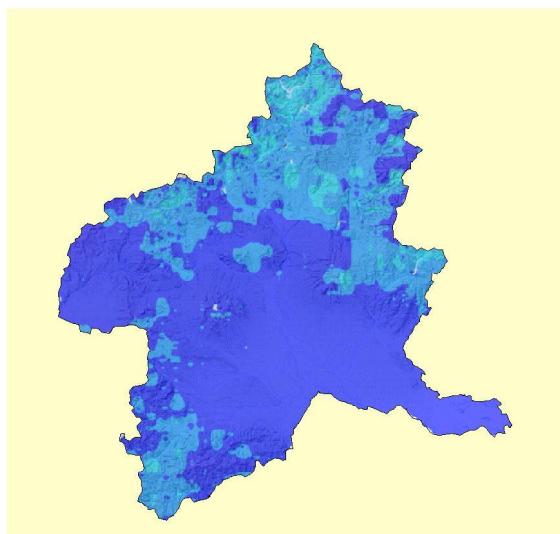
第5回（平成26年11月）



第1回の調査から38か月が経過し、山間部でも毎時0.2マイクロシーベルト以下の地域が広がっています。



第6回（平成27年11月）



第1回の調査から60か月が経過し、山間部でも毎時0.2マイクロシーベルト以下の地域が広がっています。

○「ベクレル」と「シーベルト」

ベクレルは、放射性物質の放射能の強さを表す単位です。シーベルトは、体に受ける放射線で体への影響の度合いを表します。

